

**児童生徒「一人一人」の学びを支える
教育の推進を図る学校**

「望ましい学習環境」の見える化

小諸市学校教育審議会

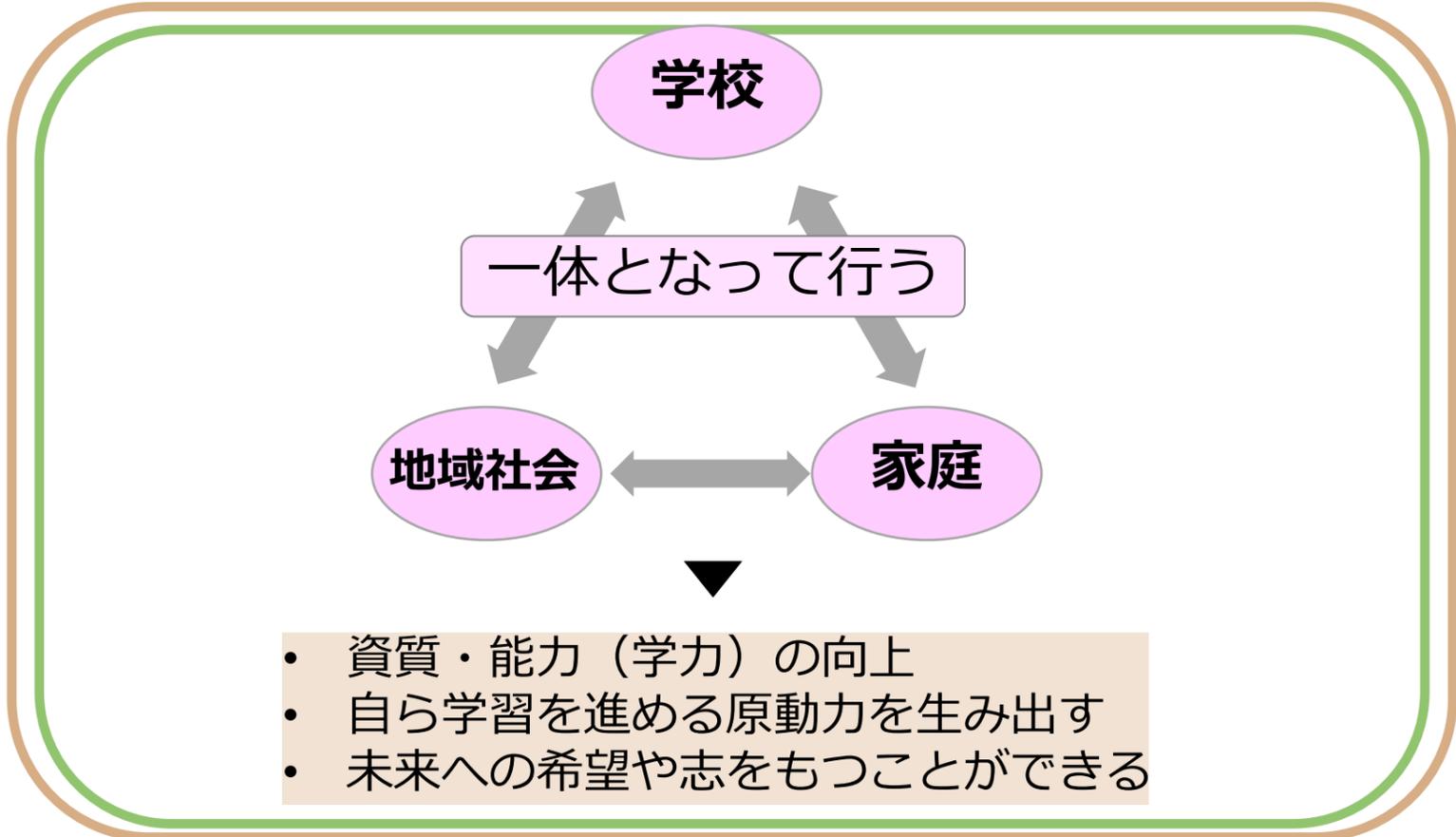
令和3年3月

求められる学校の実現に向けて

～教育を支える「ひと・もの・こと」の組織化～

1

一人一人の学びを支える教育の推進するために



2

小中一貫教育の実施例

小中教職員の交流

- ・ 加1515Mマシメントの推進（教員間の交流の確保）
- ・ 中学校専科教員の授業を小学生が受講

児童生徒の交流

- ・ まず出来るところより行っていく
- ・ 中学校の空き教室に小学生のスペースを確保

児童生徒のつながり

- ・ 学級・学年・学校を越えてつながりをつくる
- ・ 交流スペースで学年を越えて関わりあう

3

市民参加による教育の推進

学校を核としたコミュニティ

- ・ ボランティアによるさまざまなサポート
- ・ 活躍の場づくり交流の場
 - ・ 保護者・子ども・ボランティア

市と民間との連携

- ・ 共有化事例

4

学びを支える環境を整える

- ・ 保護者を支える相談体制、支援体制
- ・ 合理的配慮・ユニバーサルデザインに基づく学習と学校の環境整備

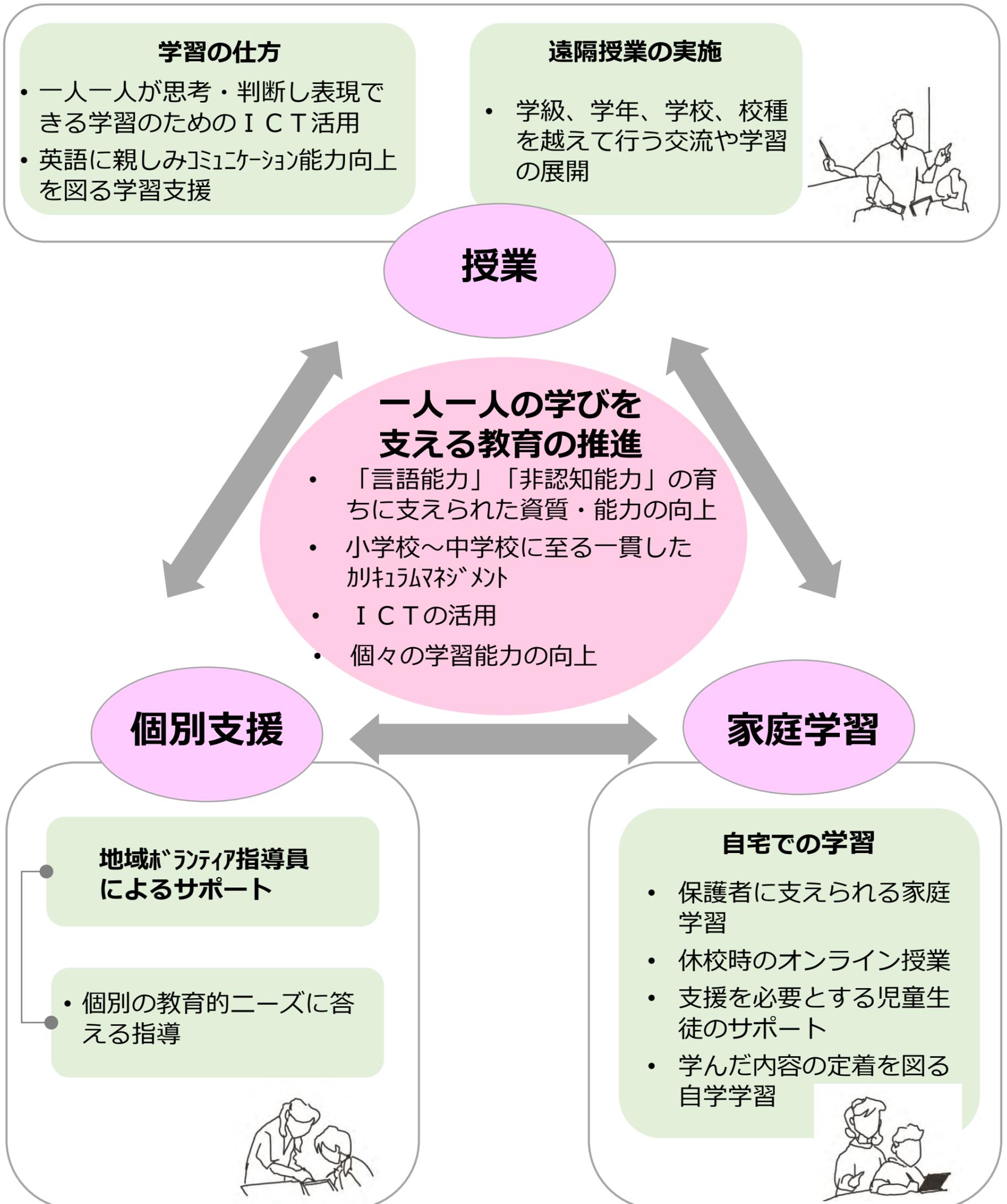
不登校対応

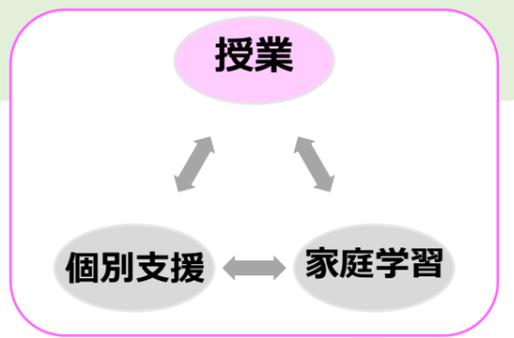
- ・ 小諸市の不登校対応の現状
- ・ 不登校対応の事例

1. 一人一人の学びを支える教育の推進

「授業」「個別支援」「家庭学習」の充実

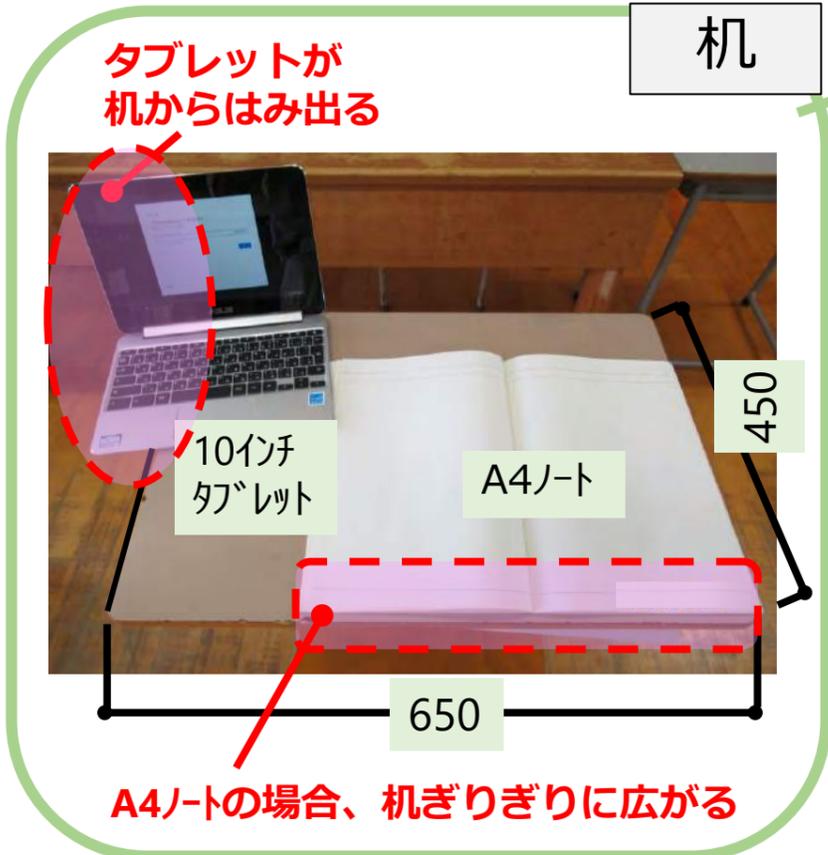
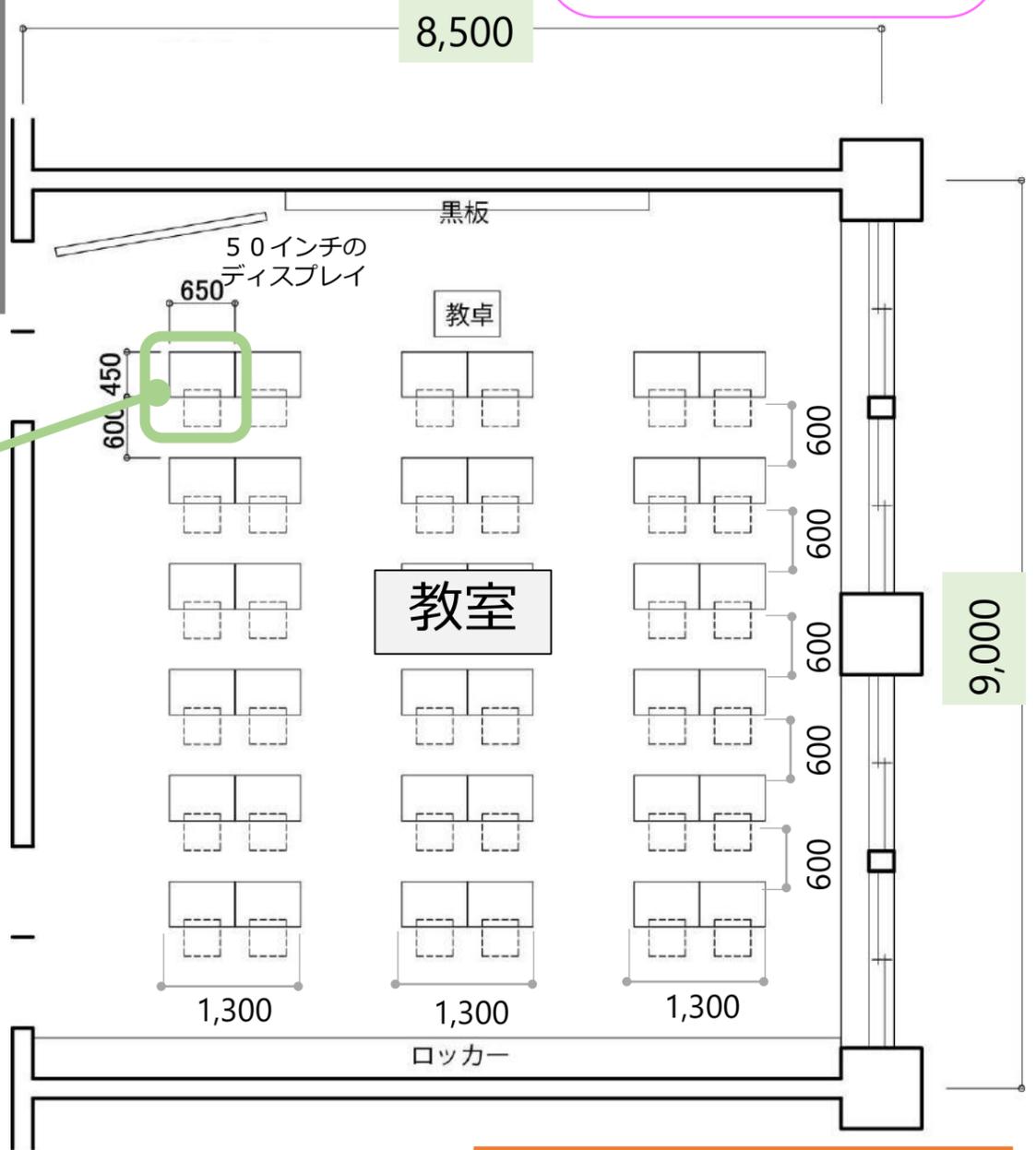
「言語能力」「非認知能力」の育ちに支えられた資質・能力の向上のため、ICT（Information and Communication Technology：情報通信技術）を取り入れて「授業」と「個別支援」「家庭学習」の3つを充実させる。





現状の教室と机の大きさ

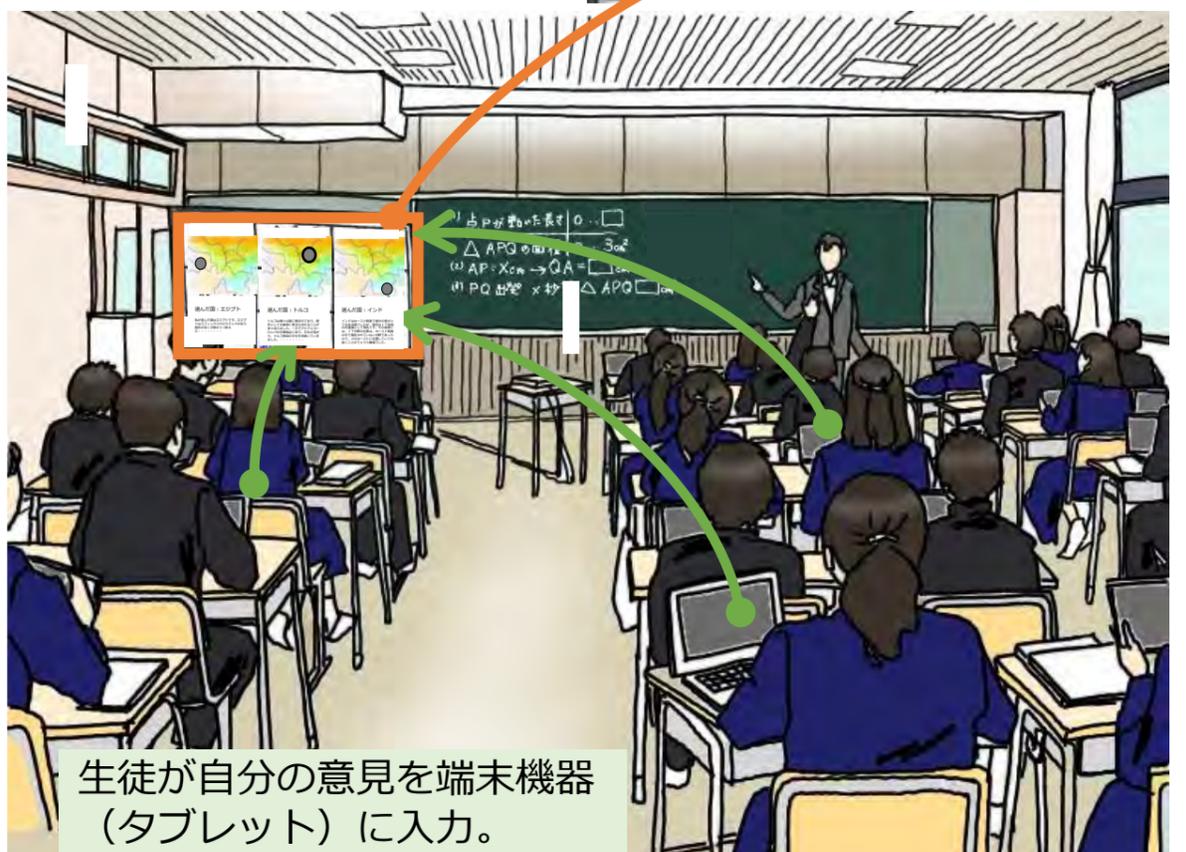
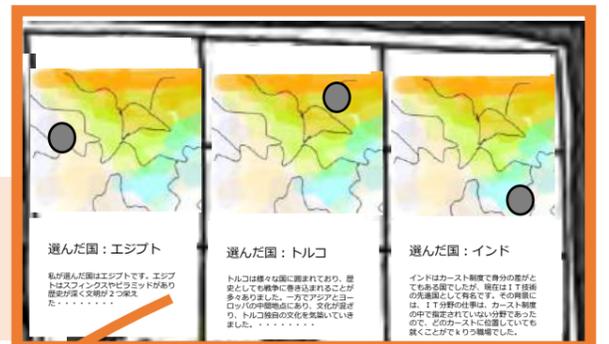
- 芦原中学校 現状の教室
 - ・ クラブルーム面積 8.5m x 9m : 76.5m²
 - ・ 1クラス 35人
- 芦原中学校 現状の机
 - 450mm x 650mm



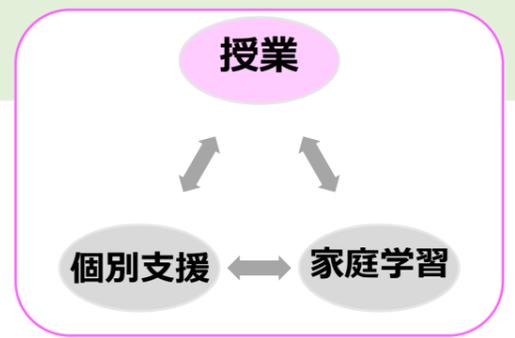
(1) ICT活用で、一人一人が思考・判断し表現できる学習

- ・ 用意した画像や動画を端末機器（タブレット）に送り、一人一人の児童生徒が取り組む。
- ・ 生徒の学習状況等をデータ化し、理解度別自動出題等、一人一人に合った学習ができる。
- ・ 教員も児童生徒も「今どこまでできるようになったのか」を把握できる。
- ・ ICTを活用した互いに検討し合う学びは、一人一人の学びを支え、思考力・判断力・表現力の育成を図る。

生徒一人一人の意見がディスプレイに表示され、一人一人の考えを共有。



生徒が自分の意見を端末機器（タブレット）に入力。



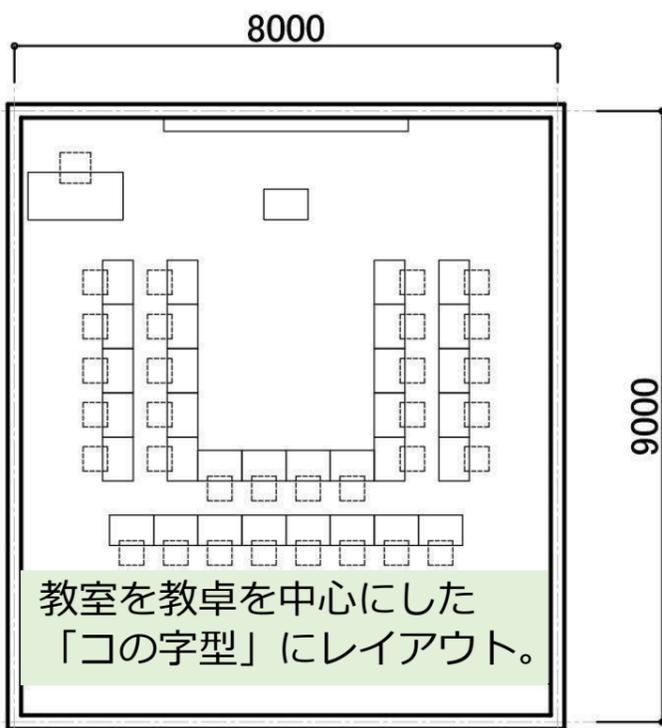
(2) 英語に親しみコミュニケーション能力向上を図る学習

- 小諸市の小学校では、平成27年度より国のモデル事業の一環として「英語教育強化地域拠点事業」に取り組み、**コミュニケーション能力を育成**している。
- 外国語指導助手（ALT）のネイティブな英語を通して。子どもが英語に慣れ親しみ、積極性を育む。「**非認知能力**」の向上にもつながる。

段階的な活用方法

1. 会話重視（コの字型授業）

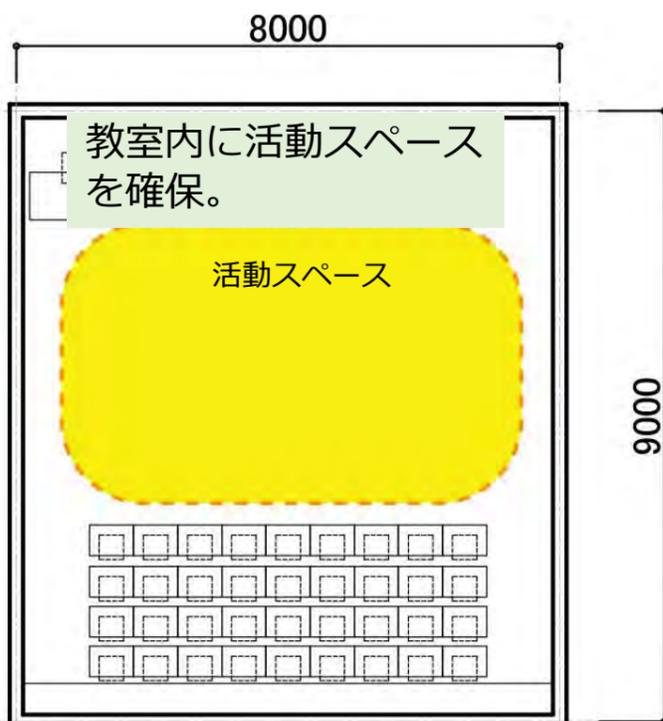
クラス担任とALTのモデル会話を見たり聞いたりしながら、会話の仕方に慣れ、子ども達みんなが挑戦してみようとする意欲を育む。



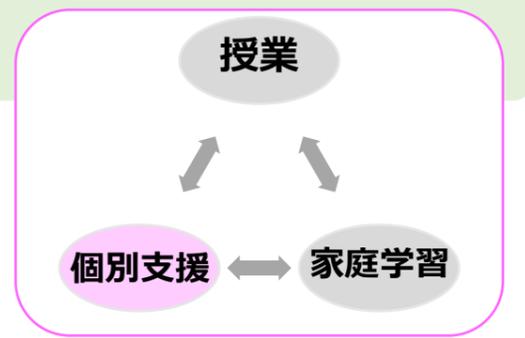
ALTとクラス担任による会話表現の授業。

2. アクティビティ重視（グループ学習）

教室内に活動スペースを確保し、体を動かして少人数で行う。身体を動かしてゲーム感覚で授業に参加することで、外国語に慣れ親しむ。



ALTとクラス担任がしゃがんで、子どもと目線を合わせた授業。



(3) 「個別支援」

① 地域ボランティア指導員によるサポート

- 地域市民の協力を得て、「**信州型コミュニティ・スクール**」の取り組みを進め、学習ボランティア等の導入が行われている。
- 放課後に子どもの学びをきめ細かく支える**ボランティア指導員**によって、**資質・能力の向上を図る**。
- ボランティアは、子どもの学習サポートの方法等を話し合い、子どもに寄り添いながら活動を行う。



② 個別の教育的ニーズに答える指導

- 指導教員、指導員に相談したり、友人と一緒に学習を進めることも可能となる。

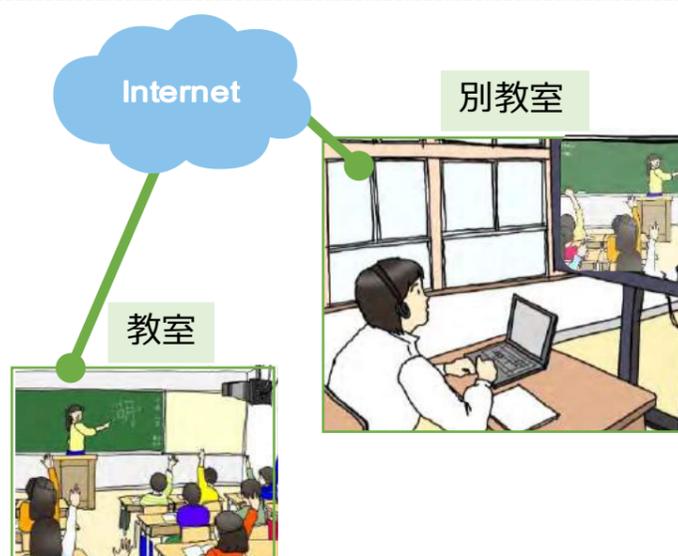


(4) 特別支援教育の充実

- 配慮や支援を必要とする児童生徒が特別支援学級だけでなく、通常学級にも在籍している。どの児童生徒も共に学び育つ仲間であることを踏まえ、個別の教育的ニーズに的確に応える指導を提供することが求められてきている。
- ことば、学習障がいのための通級指導教室を拠点小学校（坂の上、美南ガ丘）に計2学級設置している。
- 小諸市特別支援教育コーディネーター連絡会では、幼保・小、小・中の情報交換を行っている。
- オンライン上で**小学校間のデータ及びツールの活用・情報交換**を行うことで、**一人一人に合った支援の質の向上**につながる。
- オンラインで小学校と中学校とも連携がしやすくなり、**連続的な支援**ができる。

① 安心して学ぶ

- 通常学級で教師と指導員がチームをつくり、一人一人の学びを支える。
- ユニバーサルデザインを大切にした教室環境。



② 地域の人と関わりながら学ぶ

- 地域の方々の協力を得て、豊かな学びをする。

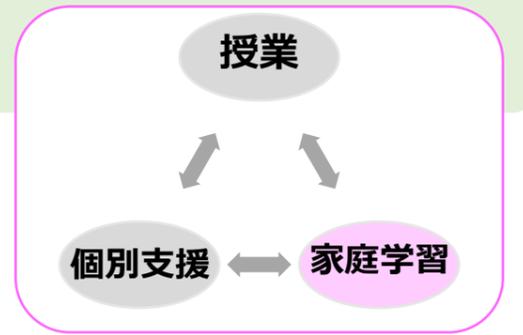


③ 一人一人のペースで学ぶ

- 音声再生や読みやすい大きさに拡大、漢字にルビを表示等、一人一人が学びやすい学習方法で学べる。



多様な学び方



(5) 学習を進める原動力を生み出す「家庭学習」

① 保護者に支えられる家庭学習

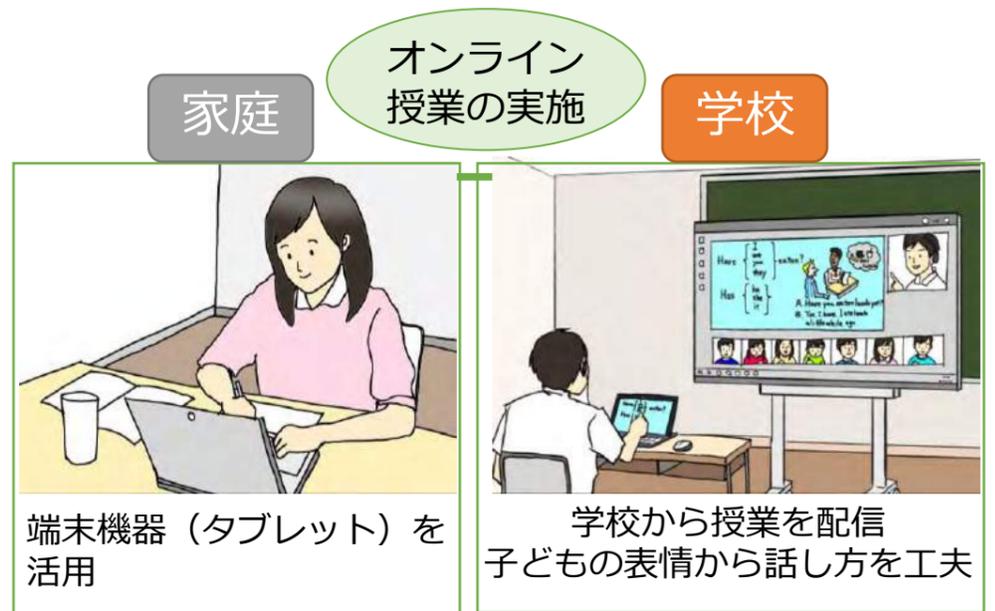
- 保護者に見守られ支えられる家庭学習は、児童生徒にとって**学習への意欲向上**となる。
- 親子が対話する貴重な機会となり、学校での様子や**心の状態への気づき**も期待でき、児童生徒にとって心の成長につながる。



子どもの読み聞かせで親子のつながりを作る。

② オンライン授業の実施

- 休校時は、学校との双方向**オンライン授業**を実施することで、家庭で学びを継続できる。



③ 放課後児童クラブ等を活用した学習サポート

- 児童の中には、自宅で十分な学習スペースを確保できない場合もあるため、放課後児童クラブや他の公共施設等を活用して自習スペースを確保する。
- 家庭での学習環境が十分でない児童生徒が、児童館、公民館、図書館等でボランティア等の支援を受けて学ぶ。



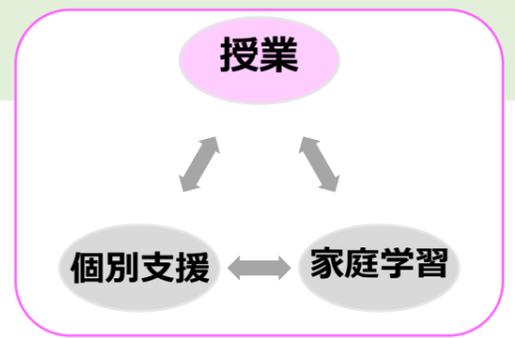
指導員に質問したり、友人と一緒に学習を進めることもできる

④ 学んだ内容の定着を図る自学自習

- 家庭に端末機器（タブレット）を持ち帰り、自宅で自学自習へつなげるため、つまづきを克服しながら学んだ内容の定着を図ることができる。
- 教員が、端末機器（タブレット）内に管理された学習履歴を確認し、子どもの学習状況を把握できる。



自室で端末機器（タブレット）を使った自学自習。

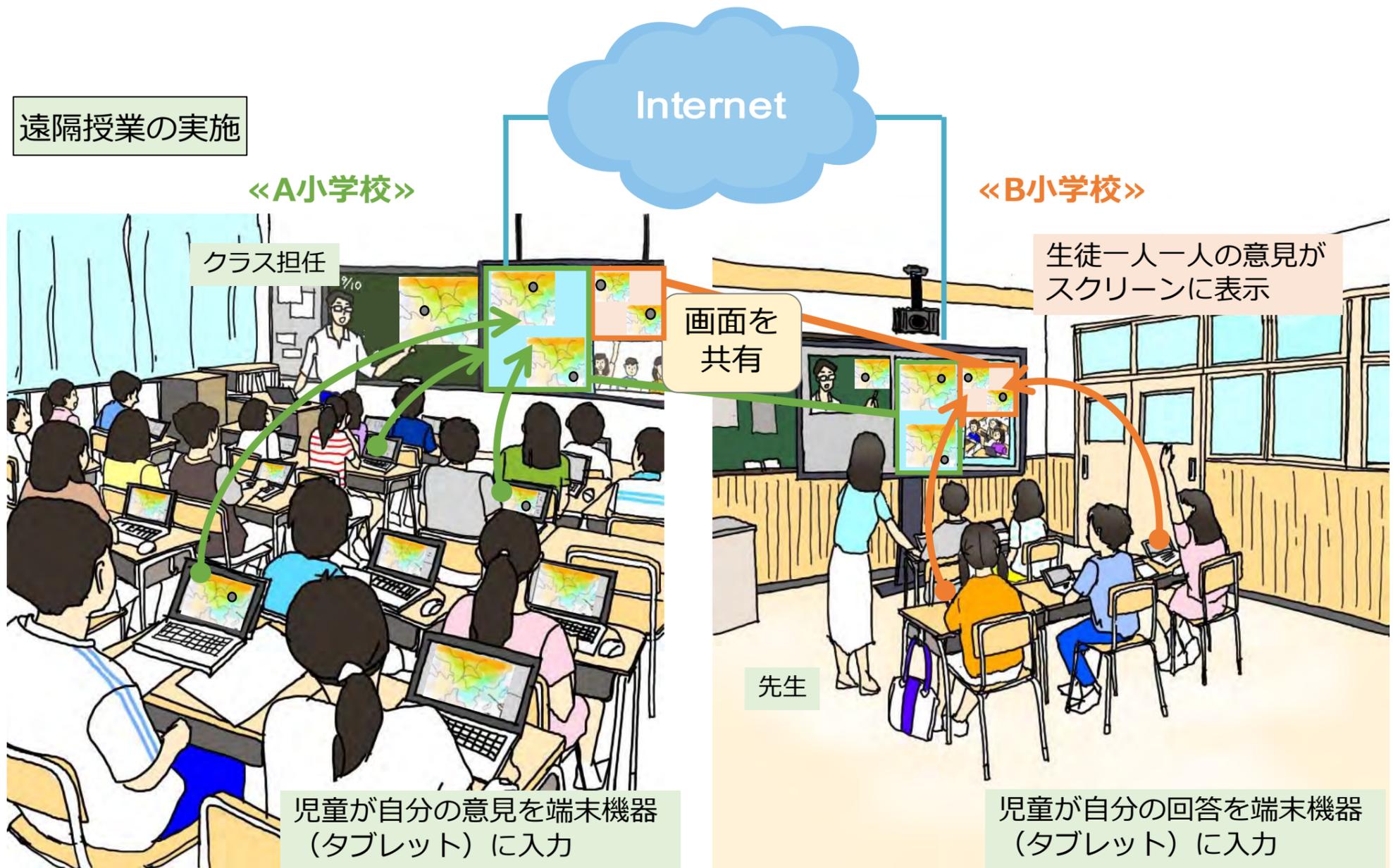


(6) 遠隔授業の実施

- 離れた2つの学校の同じ学年の児童生徒が、互いの取り組みの情報交換をしたり意見交換をしたりしながら学習を進めることが可能となる。(例:「社会」農業学習で高原野菜や果樹栽培の情報を交換)
- 補助員を設け、児童たちの学習のサポートを実施する。
- 教員は、ICT機器で一人一人の意見を同時に確認し、授業への個人の理解度を把握できる。

離れた2つの学校で同時双方向コミュニケーションを取りながら学習を進める

遠隔授業の実施



児童35人+教員がICT機器を活用して場所の離れた学校と遠隔でつながる。

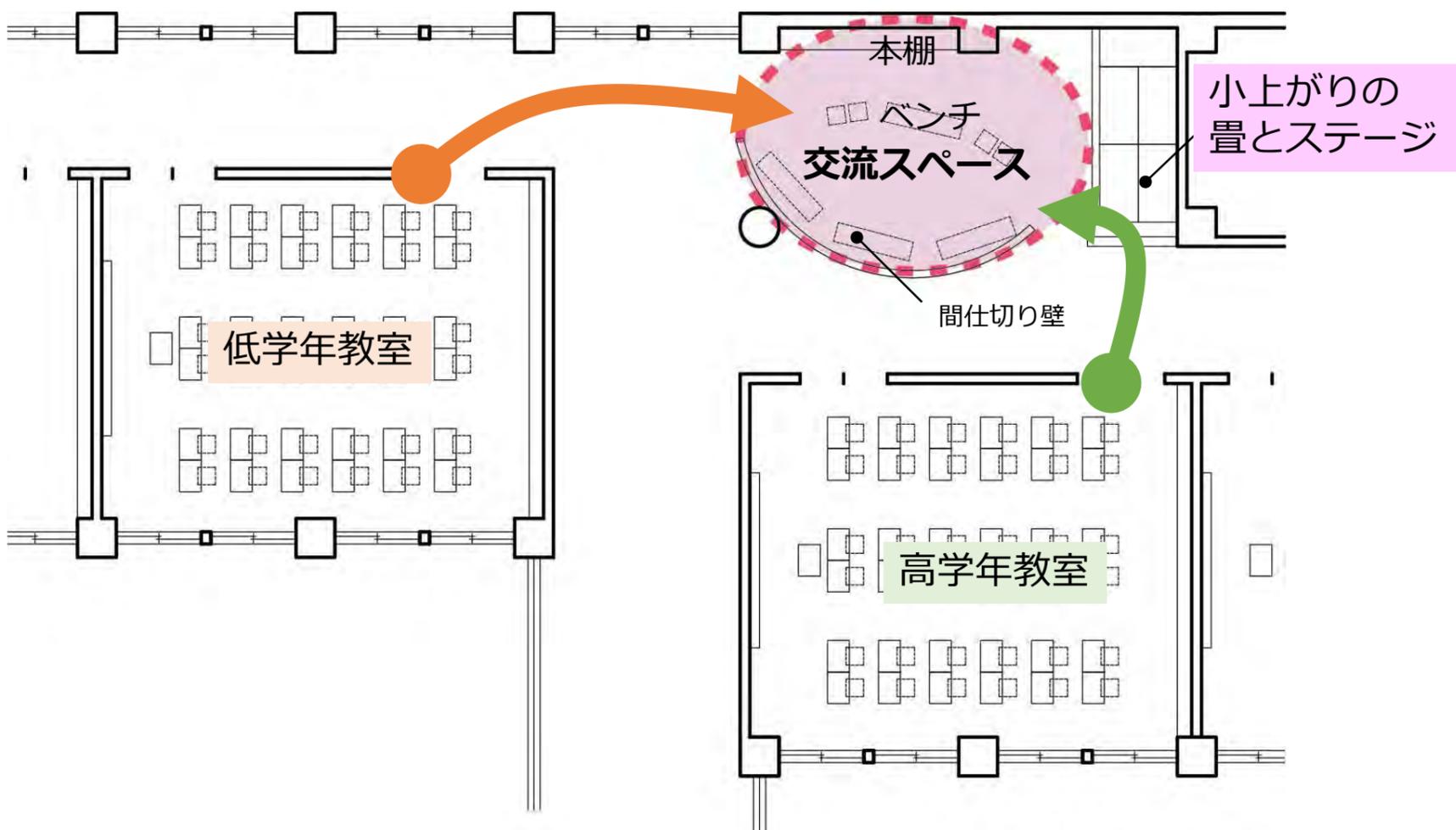
児童に対して、ICT機器の操作や学習等をサポートする補助員が付き、授業を進める。

2. 小中一貫教育の実施（例）

（1）児童生徒のつながり

① 学級・学年・学校を越えたつながりをつくる

- 小学校から中学校へ進学した際の「**学びのギャップ**」や「**学校生活のギャップ**」の解消のため「**学年を越えたつながり**」の場を設ける。
- 小学校の高学年ゾーンと低学年ゾーンの間に、ベンチ等家具を配した**交流スペース**を設ける。
- 交流スペースでは、休み時間を利用して高学年と低学年がさまざまな**交流活動**を行う。
- 交流を通して高学年の自覚が深まり、**活動の成功体験が児童の成長につながる**。



② 交流スペースで学年を超えて関わりあう

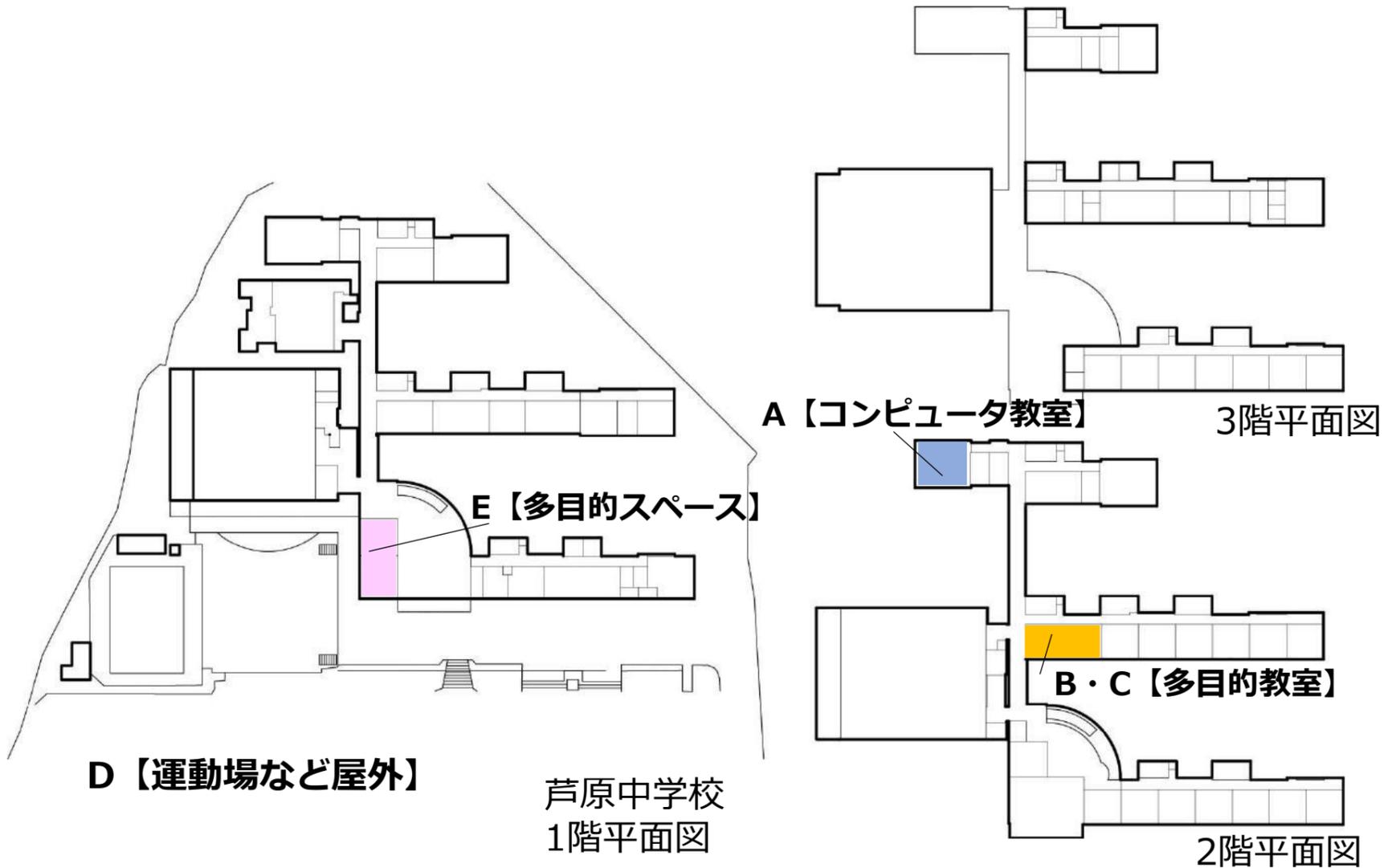
- 低学年が楽しめる絵本を探し、仲間と相談して活動に取り組む。
- 学年を越えての関わり活動が、高学年の子どもに自信、意欲、協調する力、粘り強さ等「**非認知能力**」の向上や**心の成長**につながる。
- **オンラインの小中学校の交流スペース**としても活用できる。



- 交流スペースで高学年の子どもが低学年の子どもに読み聞かせを行う。

(2) スペースの活用

① 芦原中学校で活用できそうな既存スペース



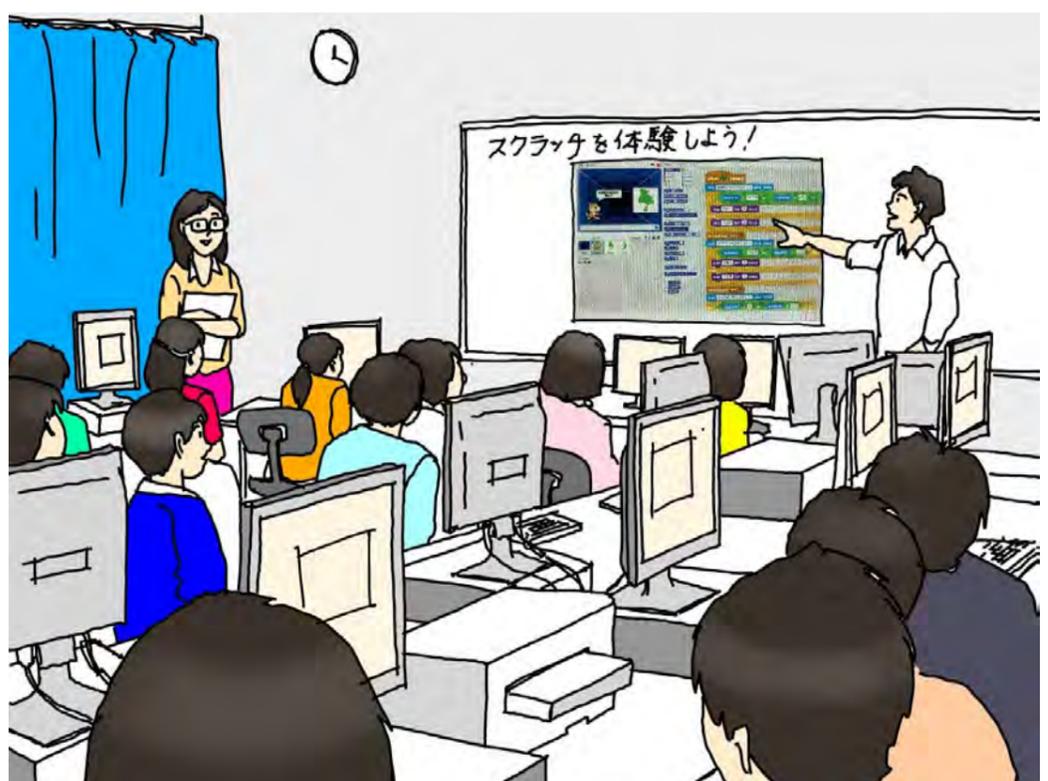
既存の教室を活かして、コンピュータ教室や多目的スペース等を小学生の居場所として確保していく。

② 中学校校舎一部を活用した活動例

小学校と中学校のつながりを充実させるため、小中連携活動を実施する。

A 中学校での1日体験授業【コンピュータ教室】

- 中学校の教員が、特別教室を利用して、パソコンや英語、技術家庭といった中学校ならではの授業を小学生に行う。



2. 小中一貫教育の実施（例）

B 共に学ぶことで交流を深める【多目的教室】

- 音楽の授業をオンラインで一緒に受けて、国語の学習の一環として、中学生による読み聞かせを実施。

学習を通して交流を深める。



C 中学生が小学生に勉強を教える【多目的教室】

- 中学生がお兄さん先生、お姉さん先生となり、小学生に勉強を教える。



D 合同で清掃活動【運動場など屋外】

- 一緒に清掃活動を行う等、小中学生同士で協力して取り組む機会を設ける。



E 小中合同で児童会・生徒会活動【多目的スペース】

- 各小学校の小学5年生と、芦原中学校の2年生が合同で児童会・生徒会活動を行う。
- 各児童会での様子を報告しあう会を芦原中学校で行う他、児童会・生徒会主催の行事を共同で実施する。



2. 小中一貫教育の実施（例）

③ 中学校専科教員の授業を小学生が受講

- 小学生が、中学校教員から専科の授業を受け、中学校の授業をイメージしやすくなる。
- 小学校から中学校へスムーズに移行できるよう、それぞれの教職員が連携し、**一貫性のあるカリキュラム・マネジメント**を推進していく。



小学生が中学校を訪問して、専科の先生から授業を受ける。

④ 英語による発表会を通じた交流

- 英語による発表会を通じた交流の中で、学ぶ意欲やコミュニケーション能力、目標に向かって粘り強くやり抜く姿勢等の「非認知能力」が育成される。



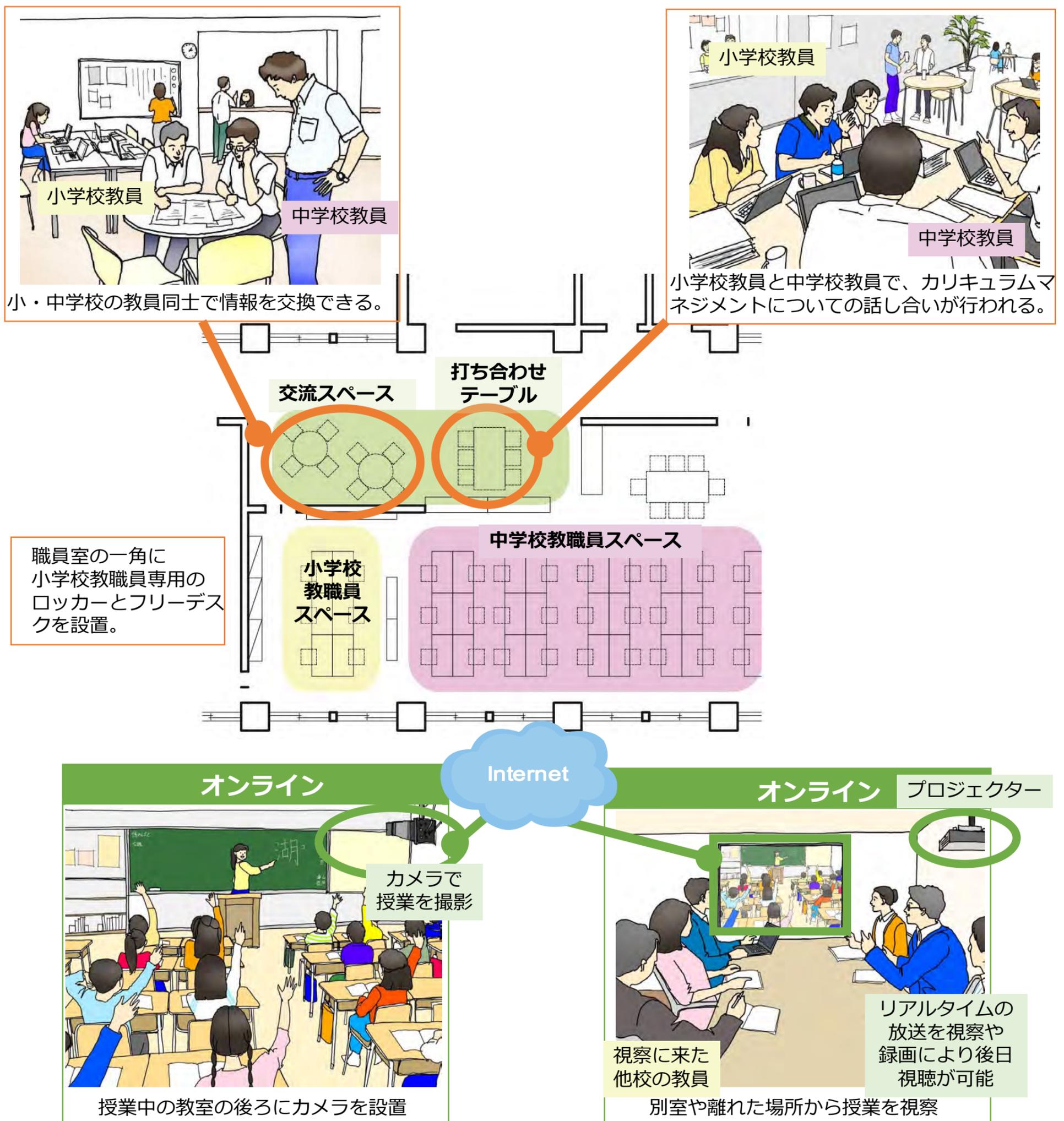
中学生が観客となり、小学生が習った英語で劇の発表会を行う。

2. 小中一貫教育の実施（例）

（3）小中教職員の交流

① 中学校と小学校の教員が交流できる空間づくり

- 中学校の職員室内に小学校教職員のデスクを配し、さらに**小学校教員と中学校教員の交流スペース**を設ける。
- **小学校と中学校の9年間**を通して連続的・系統的に指導するための一貫性のある**カリキュラム・マネジメント**について話し合い、互いに連携をとることで**同じ方向性**をもって計画的に指導にあたる。



3. 市民参加による教育の推進

学校を核としたコミュニティ

① ボランティアによるさまざまなサポート（地域の子は地域で育てる）

- 信州型コミュニティスクールの取り組みで、すでに学習ボランティアを実施している。
- 子どもは、多様な地域の方々と触れ合うことで、「コミュニケーション能力」「人間関係形成能力」が高められる。
- 地域ボランティアは、ボランティア活動を通じてやりがいを感じ、**日々の活力**につながる。

ボ
ラ
ン
テ
ィ
ア
サ
ポ
ー
ト
メ
ニ
ユ
ー

《放課後学習のサポート》 信州型コミュニティスクール

- 放課後に空き教室等を利用して、地域ボランティアが子どもの学習をサポートする。端末機器（タブレット）を用いた学習等により支援していく。

《読み聞かせサポート》

- 読み聞かせにより様々な世界に触れ、知的好奇心が刺激され「言語能力」等の資質・能力が育まれる。

《校舎周辺整備のサポート》

- ボランティアによる草取りや花の手入れを中心に環境整備を実施する。地域の人々が学校に来校することで、**学校が地域に開かれた場所**となる。

《登下校の見守り隊で安心安全をサポート》

- 登下校時に横断歩道等で子どもを見守るボランティア活動。登下校時に挨拶を交わす等ふれあから、**地域との絆も深まっていく**。



地
域
か
ら
学
ぶ

《総合的探究活動》

- 小学校の生活科や中学校での総合の時間に、地域に出て、小諸市について**地域の人と一緒に学ぶ**。
- 地域の人を授業に招いたり、**オンライン**で繋がったりして授業を実施することができる。
- 地元企業の職場体験、田植え体験、伝統行事や文化財等、小諸市について理解を深めることで、**小諸市で育ったことに誇りを持ち、地域愛が育まれる**。

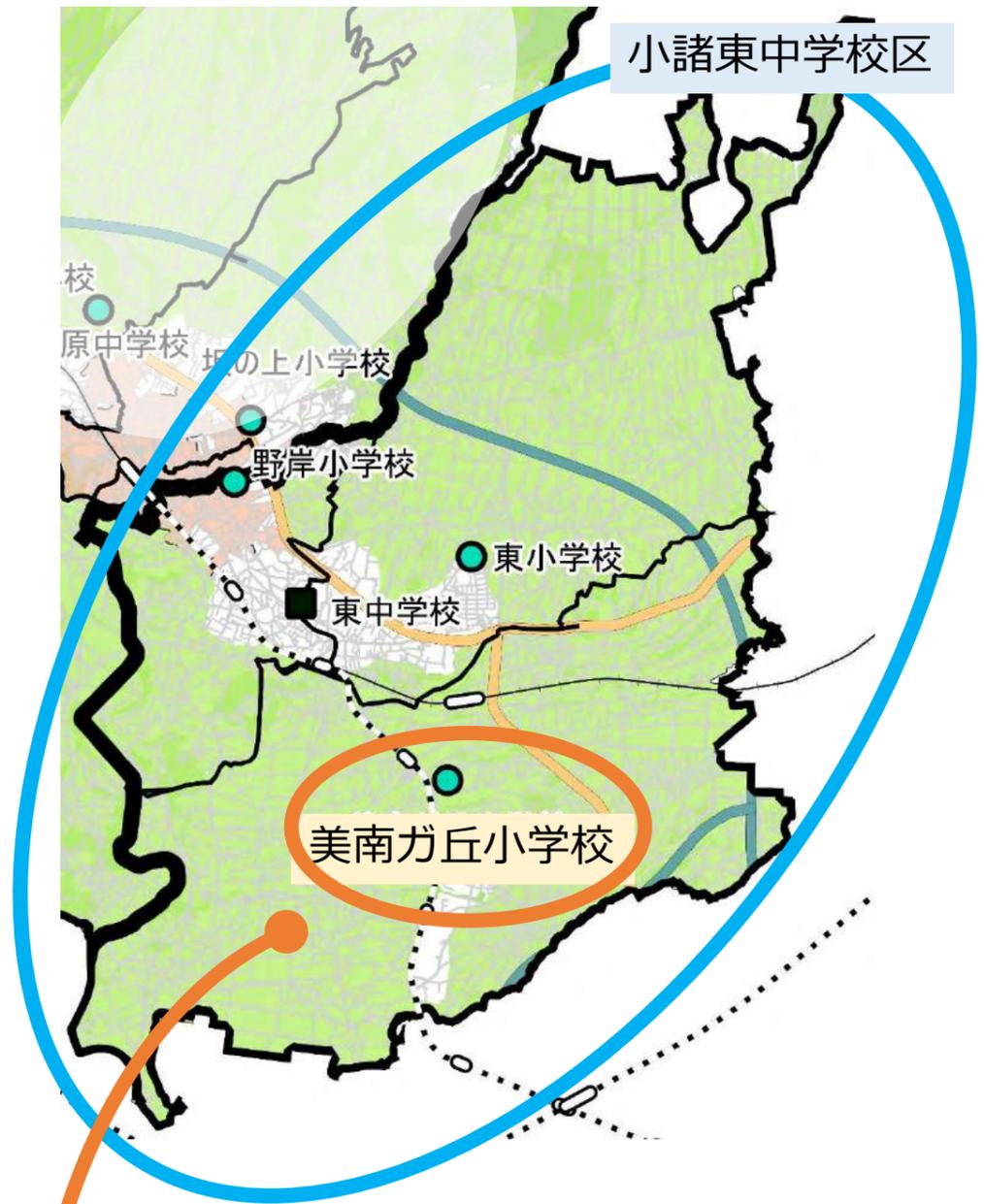


小諸の魅力再発見

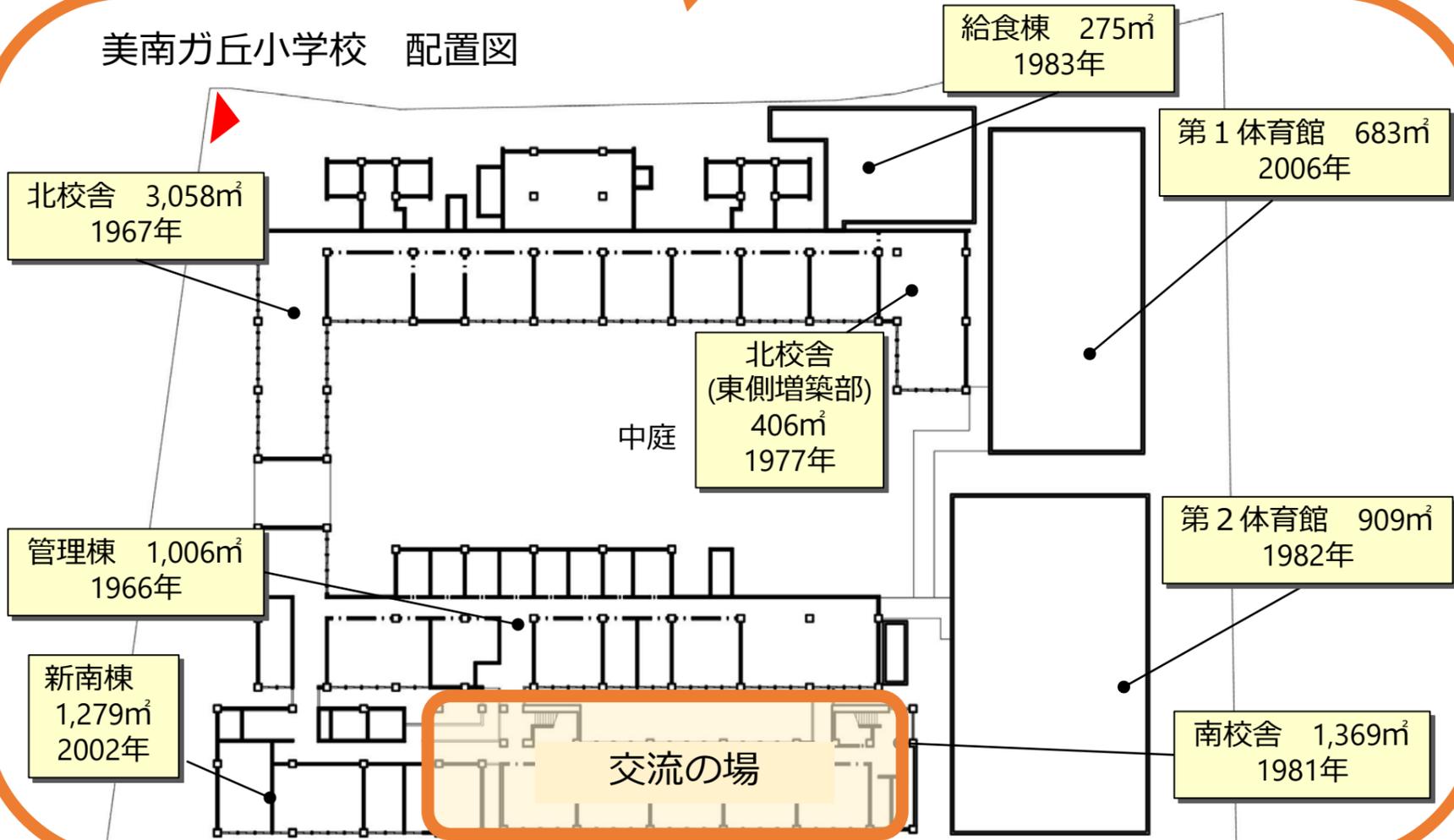
3. 市民参加による教育の推進

② 活動の場づくり

- 学校施設内に住民との交流できる場を設ける等、**地域のコミュニティ拠点**として活用していくことが考えられる。
- 地域住民が日常的に学校を訪れ、過ごせる場所を学校内に設け、**コミュニティスクール**を促進する。
- 日常的に学校を訪れる機会が増えると有事の際にも、対応が可能となる。



美南ガ丘小学校 配置図

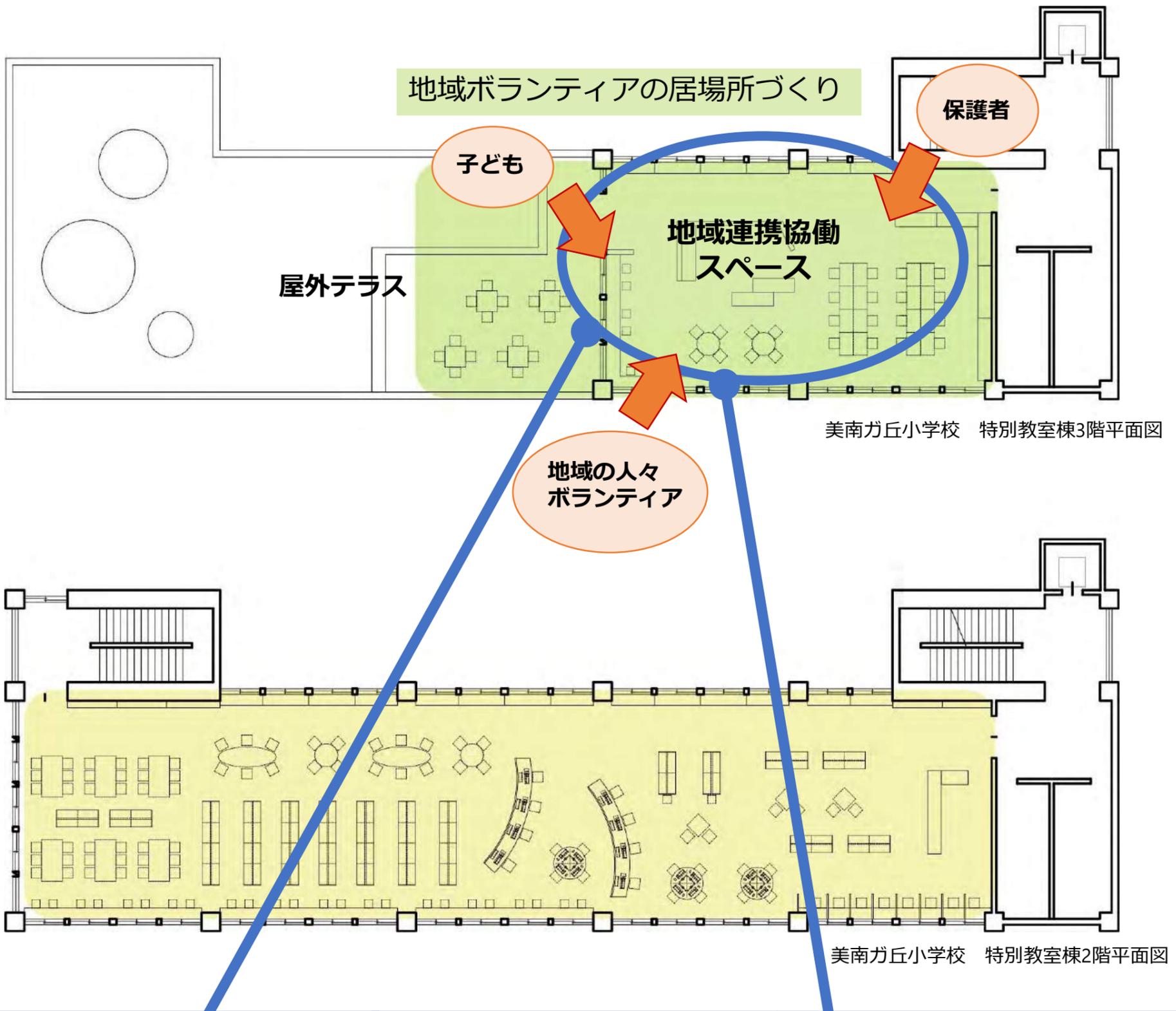


小諸東中学校区において、美南ガ丘小学校の3階を交流の場とする案を提案。

3. 市民参加による教育の推進

③ 地域連携協働スペースの導入

- 学校内に地域連携協働スペースを設置することで、**学校と地域が連携協働して取り組む教育活動について日常的に計画・実施することが可能になる。**
- 地域連携協働スペースでは、**保護者とボランティア、子ども、お年寄り等、様々な人が集い、交流できる。**



4. 学びを支える環境を整える

不登校対応

① 小諸市の不登校対応の現状

- 小諸市では、芦原中学校区に小諸市教育支援センターが1つ設置されている。
- センター長1名、指導員3名、スタッフ4名、教育委員会事務局（指導主事3名）が連携し、対応している。
- 不登校支援講師が、市単独で中学校に4名配置されている。



- 教育支援センターでの活動としては、教科の学習、山菜採りや畑等の野外学習・調理活動・ものづくりや読書等の自由時間がある。



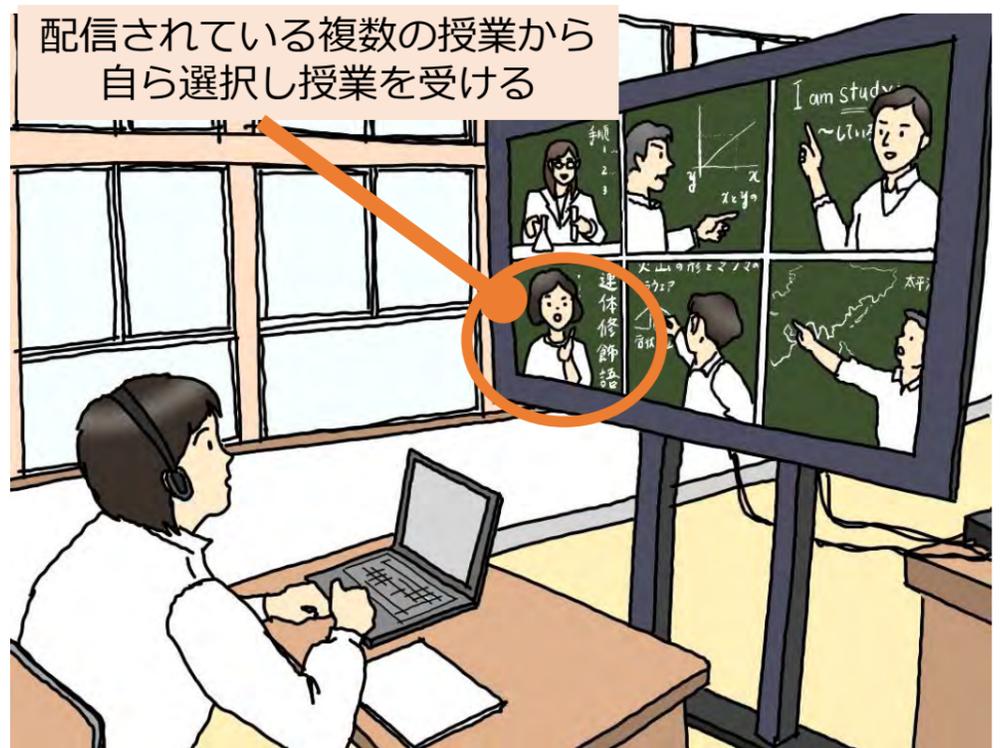
4. 学びを支える環境を整える

② 個室空間での不登校対応

教育支援センター内に、パーテーションで区切られた空間（ブース）を設ける。

好きなブースを選び、オンラインで好きな授業に参加できる。

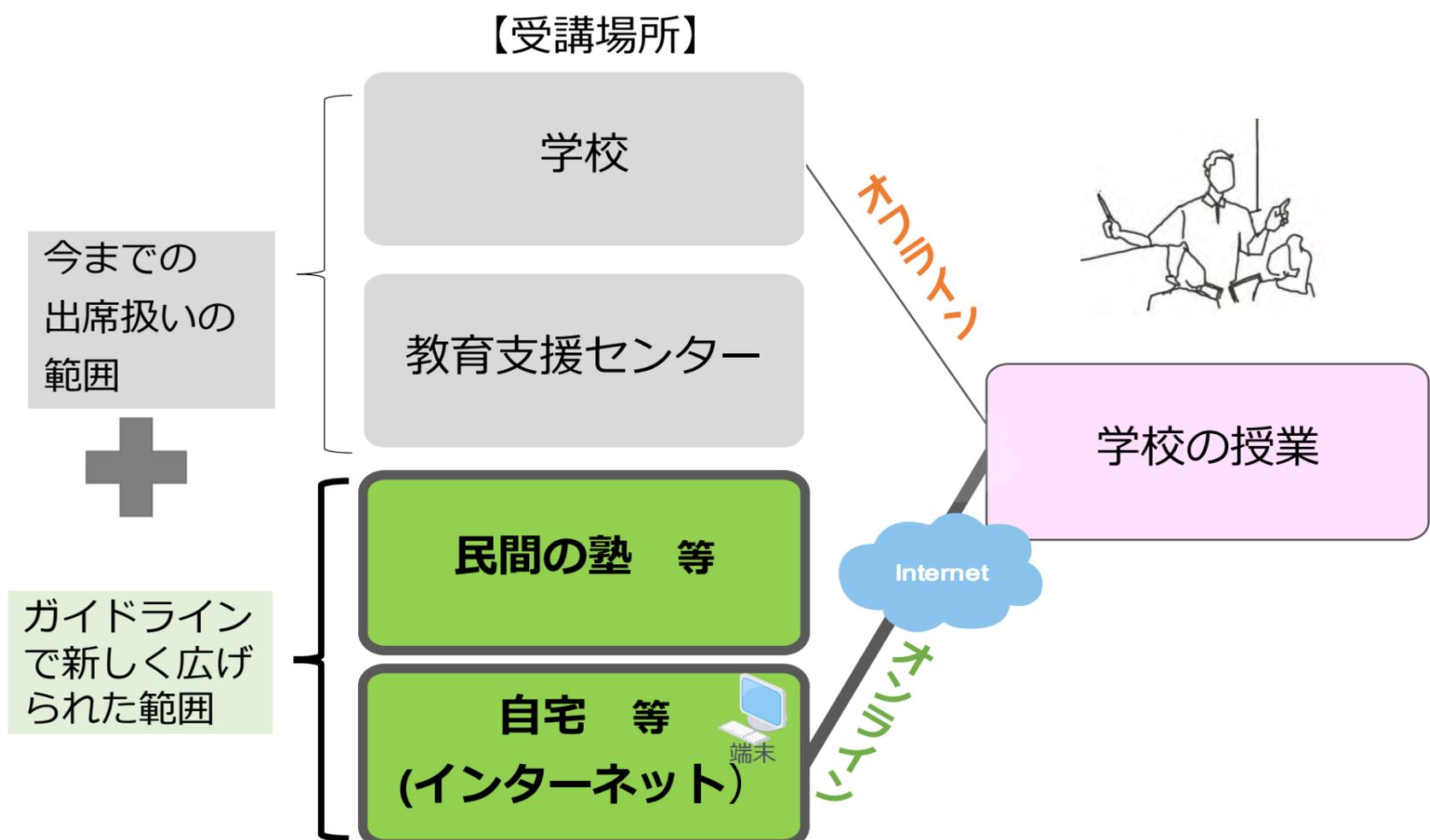
学校の授業を
学校に行けない児童生徒も
受けることができる



パーテーション等で区切られた個別の空間

③ オンラインでの不登校対応の事例（長野県松本市教育委員会）

- 松本市では、不登校になっている児童や生徒の学校への出席扱いになる範囲が、ガイドラインによって**民間の学習塾への通学**や**インターネットを活用した学習**にも広がられている。
- 児童や生徒が希望すれば、いつでも学校へ復帰できることも盛り込んでいる。



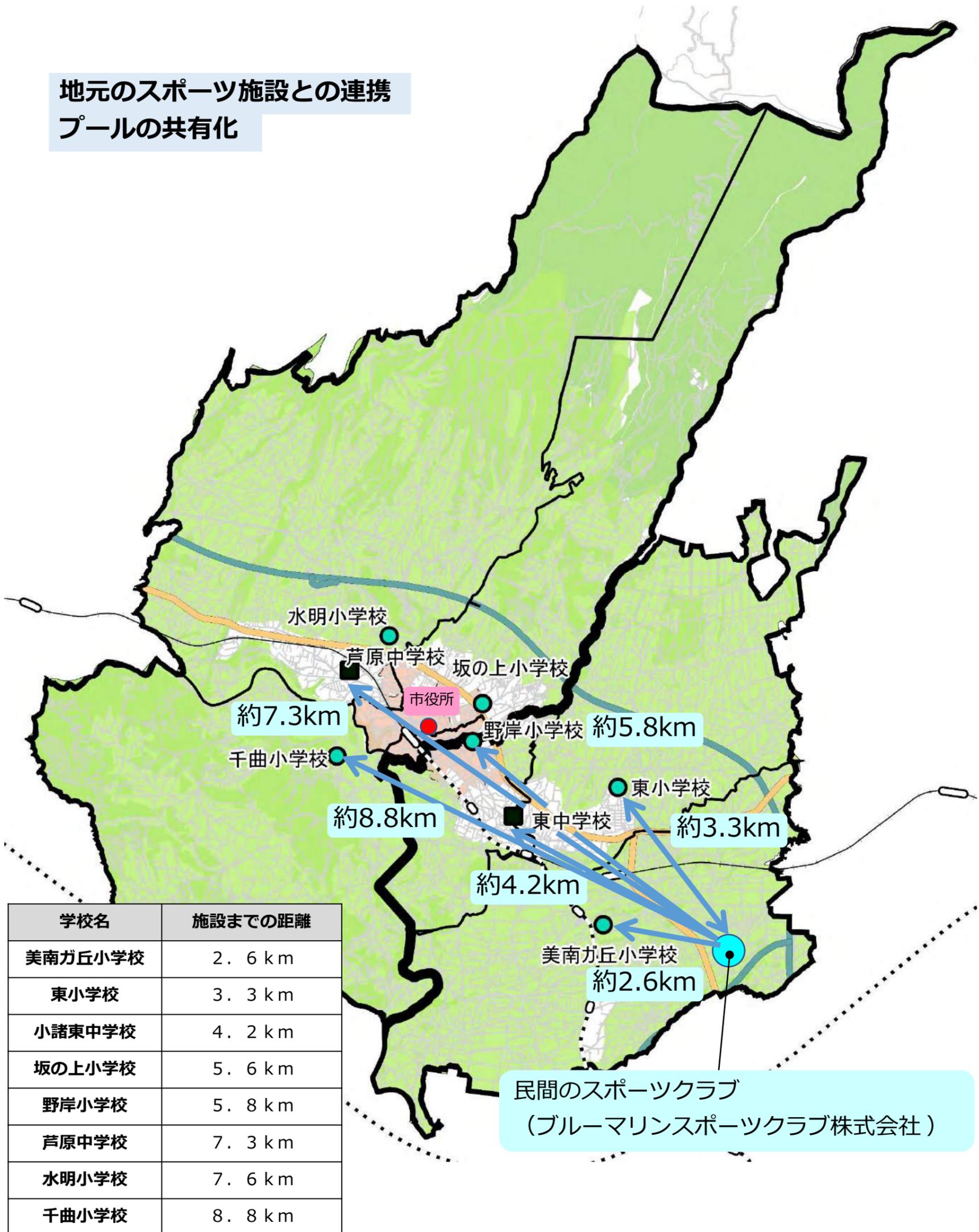
5. 市と民間施設との連携（例）

民間施設との共有化

① 小諸市でのプール共有化実践

実際に行われている他県の事例を参考に「2. 民間スイミングスクールで水泳授業を実施」の展開が可能であると思われる。

地元のスポーツ施設との連携
プールの共有化



5. 市と民間施設との連携（例）

② 民間施設との共有化例

I 学校プールを全校廃止し市民プールを活用（神奈川県海老名市）

- 老朽化対策として学校プールを全校で廃止し、市内4か所の屋内温水プールを活用して水泳授業を行っている。
- 移動方法は、徒歩（1校のみ）または借上げバス（18校）



学校プール



解体後

プール1か所削減で
-1.5億円削減効果

II 民間スイミングスクールで水泳授業を実施（千葉県佐倉市）

- 平成25年度から市内の小学校1校でプールをなくし、水泳授業は民間事業者が運営するスイミングスクールで実施している。
- 平成28年現在、2校が民間スイミングスクールを活用して水泳の授業を実施。

《効果》

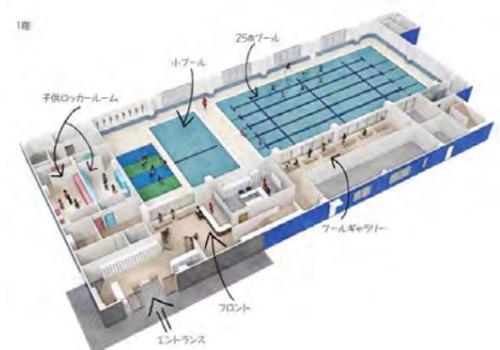
- 送迎バスでの移動が可能。
- 学校の教員に加え、スイミングスクールのインストラクターも水泳の指導が受けられる。
- 安全管理面での教員の負担が軽減される。
- 水温や水質、衛生管理等の面で安定した環境で授業ができる。
- 天候に左右されない。



外観

III 市が土地を提供し、民間スポーツクラブがプールを建設（愛知県高浜市）

- 高浜小学校の建替えを機に、学校にプールを設置するのではなく、市が土地を提供し、民間活力により整備した民間プールで、新たに水泳授業を実施する。
- 5小学校と1中学校が段階的に共用化を進める予定。



プール内部